



は左俣にルートをとる。ヤブこぎ気味に遡ると、沢の水もチヨロチヨロとなる。

尾根が見えてきたところに炭焼き

地の確認をしたあと、クラツ沢への下降を開始する。(記：)

「タイム」 出合(九：〇五) ↓ 終了(一

一：三五)

仙 沢

一九八三年五月二一日

一五時三〇分、仙沢の下降を開始する。すぐに小滝が出てきた。斜瀑であり、フリクシヨンがよくきくうえ、沢幅が狭いため岸の樹木の枝を利用できるので、クライミングダウンの必要もなく下る。

両岸には次々と炭焼き釜跡が出てくる。この沢そいは炭焼きの盛んな所だったのだろう。

シドキやウルイといった山菜を摘みながらゆっくりと下ってゆき、一六時二五分、観音堂沢本流へと出た。

釜あとがあり、ここから尾根に上がる。尾根上で昼食をとり、木に登って現在

本流に出る直前にかかる三つの滝の最下段のものだけは下ることができず、左岸を捲く。全体としては平凡な沢であった。()

「タイム」 下降開始(一五：三〇) ↓ 下降終了(二六：二五)



座頭沢の遡行